

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	理工学研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.3 教育方法
小項目	6.3.1 教育方法および学習指導は適切か。
要素	教育目標の達成に向けた授業形態(講義・演習・実験等)の採用 履修科目登録の上限設定、学習指導の充実 学生の主体的参加を促す授業方法 研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導(院) 実務的能力の向上を目指した教育方法と学習指導(専院)
小項目	6.3.2 シラバスに基づいて授業が展開されているか。
要素	シラバスの作成と内容の充実 授業内容・方法とシラバスとの整合性
小項目	6.3.3 成績評価と単位認定は適切に行われているか。
要素	厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示) 単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性 既修得単位認定の適切性
小項目	6.3.4 教育成果について定期的な検証を行い、その結果を教育課程や教育内容・方法の改善に結びつけているか。
要素	授業の内容および方法の改善を図るための組織的研修・研究の実施

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 「大学院ファカルティ・デベロップメント部会」による全学的授業改善に則った、授業方法の改善を行う。	→学生の授業内容に対するアンケートの満足度指標。	B	B	B	B	B
2. 大学院英語教育を強化するために、英語のみによる学位コース設置に伴い、英語のみによる授業科目を開講する。	→開講科目一覧。	D	C	A	A	A
3. 複数教員による研究指導及び研究進捗状況確認のため、中間報告会などを行う。	→複数教員が参加する中間報告会などの開催状況。	B	B	B	B	B

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院のFD講演会を毎年1～2回行っている。大学院委員会でコースワークについて授業アンケートを実施することを決定し、2013年度から実施している。また、学生に順次性のある履修を促すために、4月に指導教員による履修指導を徹底した。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学生の授業に対する満足度は平均47%だった。アンケート結果を分析し各教員が授業にフィードバックをする必要がある。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か アンケートの結果を各教員が分析し授業にフィードバックするとともに、大学院委員会または各専攻会議において授業内容の適切さについて議論し今後の授業に反映させる。	☆
		その他	☆

目標2	A	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2012年9月に英語のみによる修士コースとして国際修士プログラムを開設し、2012年度および2013年度の入学生を迎え授業を実施している。日本人学生もこのコースの授業を履修可能とした。2012年11月に各専攻で受講者(外国人)に聞き取り調査を行い、就学上の問題点を意見聴取しフィードバックをかけた。また、英語プレゼンテーションセミナーへの参加を促した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 理工学研究科の国際化が促進された。また、日本人学生の英語力向上にも効果があった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 英語修士コースをもつ専攻を増やすことを検討する。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
目標3	B	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 全専攻において入学時に複数の指導教員を決めて指導する制度を整備した。すでに修論の中間審査を実施している4専攻以外の専攻において、それに相当する仕組みをつくることを各専攻会議で検討した。さらに、評価方法についても各専攻で方針を作成し学部・研究科の執行部会で議論した。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 審査の透明化がはかれ教員によって評価基準が明確になった。しかし、システムとして運用した結果が出ていないので引き続きチェックする必要がある。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か システムとして機能しているか引き続きチェックしていく。さらに、到達度不足の学生の指導について早い時期に対応できるようにする。</p> <p>その他</p>	☆ ☆ ☆ ☆
備考			☆